

『不思議の国のアリス』と言えば誰でもが名前は聞いたことがある作品だろう。その作者であるルイス・キャロル (本名チャールズ・ラトウィッジ・ドジスン) もまた、かなり一般に浸透している名前と言える。しかしルイス・キャロルが 19 歳でオックスフォード大学クライスト・チャーチに入学し、数学と文学で博士号を取り、数学の講師をしながら終生オックスフォードで暮らしたことを知っている人は少ないかもしれない。オックスフォードこそアリスの故郷であり、アリスの世界を生んだ地であった。現在ではクライスト・チャーチの真向かいには「アリスの店」**Alice's Shop** が店を構え、その隣には「アリスのティールーム」**Alice's Tearoom** というカフェが軒を連ねる。今日もそれらの場所が大勢の日本人観光客でにぎわっていることは言うまでもない。

この『不思議の国のアリス』は、キャロルがアリス・リディルという少女のために作った童話だと言われ



図 1 多くの観光客で賑わうアリスの店
<http://www.wandelgek.nl/?p=34933>



ている。実のところ、当時の最新技術のカメラを使って少女を数多く撮影した写真が残っていることもあって、キャロルとロリータ・コンプレックスを結びつける解釈が盛んに唱えられた時期があった。しかし最近の研究は、キャロルが性愛の対象として少女を好んだという解釈にはむしろ根拠が薄いと退けている。結局キャロルは、そのナンセンスと言葉遊び、そしてファンタジーから成り立つ作品を、身近な少女に捧げたいと思い、学寮長の娘であるアリスをたまたま主人公にしたということなのだろう。

図 2 ルイス・キャロル撮影のアリス・リディル。
1861 年出版『地下の国のアリス』最終ページを飾った。

筆者が中学時代に出会った教科書の一節にキャロルが作った「せいうち、大工とふたり連れ」という詩があった。『不思議の国のアリス』*Alice in Wonderland*に出てくるお話だ、という解説がついていたが、実際は続編にあたる『鏡の国のアリス』*Through the Looking-Glass*に出てくる詩である。この物語の中には他にも、マザー・グースにも登場するトウィードル・ダムとトウィードル・ディーがアリスに自分たちをうたった詩を暗唱してくれる場面がある。マザー・グースの主題がアリスとともに遊ぶという不思議な情景だ。第一作の「不思議の国」はトランプの世界であるのに対してこちらの「鏡の国」はチェスの世界である。

さて、「せいうち、大工とふたり連れ」は一体どんな詩なのだろう。筆者がこの詩に出会ったのはまだ小学生のころ、しかも英語ではなく日本語の翻訳でであった。「せいうち大工と浜辺をふたり、近いところを歩いていった」、「ふたりはこんなにどっさり砂を、見るのはつらいとさめざめ泣いた」、「砂をすっきりとりのけたなら、なんとすてきな眺めだろうな」、「おとめ7人柄ぞうきん7本、半年がかりで掃いたとしたら」、「『いったい君は』とせいうちが言う、『キレイになると考えるかね』」、「『怪しいものさ』と大工は答え、苦い涙をはらりとこぼす」。このまったく意味が感じられない会話に、筆者はなぜかわくわくしてしまったのだ！ その後、なぜか牡蠣を引き連れて浜辺を行進しはじめるせいうちと大工。長い道のりを歩かされて不安に思い始める牡蠣たち。最後にせいうちと大工はそんな牡蠣を残らず平らげてしまう…。詩を朗読し終わった後に、せいうちと大工のどちらがよりたくさんの牡蠣を食べたか議論を始め、語り手であるダムとディー、そしてアリスはどちらがより食べたかの結論を出すことができず当惑してしまう。ナンセンスをそのまま面白いと思わない人に、そのわくわくする不思議な感覚を伝えることは難しい。この詩に初めて出会った小学生当時の筆者とて、別に何を理解していたわけでもない。ただただ、そのわけのわからない言葉の響きの面白さ、そしてリズムの良さに触れていることそのものが楽しくて、アリスの世界に浸っていただけなのだ。

ところで、『アリス』翻訳の歴史を振り返ってみると、改めて「アリス文学」の奥深さを痛感する。これは「鏡の国」に出てくるまた別の詩「ジャバーウオッキー」の高橋康也訳と柳瀬尚紀訳、そして岡田忠軒訳を比較してみるとよくわかるだろう。ナンセンスとだじゃれに満ちあふれたこの翻訳に挑戦した日本人の訳者、主な方だけで20人はいるのだが、血と汗にじむ並々ならぬ苦労をしたことがしのばれる。筆者にはこんな破天荒な作品を訳す度胸も能力もとてもないけれど、その作品を愛する心にはせめて近づきたいものだ。

さて、キャロルの言葉遊びのセンスには独特のものがある。ドジソンがアリスという少女と創りあげた空想世界の産物だけだったのではないだろう。大人との普通の交流の中で生まれるちょっとした子供らしい誤解、そんな言葉遊びがキャロルの造語の中にはふんだんに含まれている。一例が「鏡の国」を歩き回っている「*Bread-and-Butterfly*」だ。「ちょうちょはなぜ「ちょうちょ」って言うの?」そんな言葉を覚えて間もない、幼い子供の声が聞こえてきそうではないか。*Butterfly* はなぜ *butterfly* なのか? 蝶は飛ぶ(*fly*)から *Fly* である。しかし、*Butterfly* とは? 子供は自分なりの頭で考えるだろう。これは、バターが飛ぶというに違いない、と。でもぬるぬるしたバターだけが飛ぶのはおかしくないのだろうか? バターが付いているパンが飛ぶのであればおかしくはないが? そんな発想から、*Bread-and-Butterfly* は生まれるのだろう。ところが、*Butterfly* という単語を思い浮かべずに、「バター付きパンフライ」という虫が登場してきても、大して面白くはない。翻訳ではじめてアリスの世界に触れた筆者が、ほどなく英語に興味を持ったのはきっと偶然ではなかったのだと思う。はじめて「バター付きパンフライ」を読んでから「なぜバタ

一付きパンフライがそんなに面白いのだろう」という疑問がきつと長いこと、無意識のうちに頭の中にあつたのに違いないからだ。キャロルのナンセンスな言葉遊びの数々は、根本的な言葉そのものへの興味につながるヒントを、筆者の頭の中に種子として頭の中にたくさん撒いてくれたのではないか、そんな気がするのである。

挿絵画家 ジョン・テニエル John Tenniel (1820-1914)

テニエルは1820年に、ダンスとフェンシング教師の息子としてロンドンに生まれた。1840年、二十歳のとき父親とフェンシングをしていて片目を失明したというショッキングなエピソードを持つ。ロイヤル・アカデミーの教室に短期間通ったことはあるものの、ほとんど独学で絵を習得。1850年、風刺漫画



THE NEMESIS OF NEGLECT.

"THERE FLOATS A PHANTOM ON THE SLUMS FOUL AIR,
SHAPING TO EYES WHICH HAVE THE GIFT OF SEEING,
INTO THE SPIRIT OF THAT HATEFUL LAIR,
FACE IT—FOR VAIN IS FLEEING!
RED-HANDS, RUTHLESS—OVERTHE UNFEELT,
THIS MURDER'S CRIME—THE NEMESIS OF NEGLECT!"

図3 1888年の『パンチ』誌に掲載されたテニエルによるネメシス・オブ・ネグレクト

誌『パンチ』の専属画家になった。1864年に前任のジョン・リーチのあとを受け、1901年に引退するまで政治漫画家のチーフとして活動した。その政治風刺の画風はヴィクトリア朝英国社会に大きな影響を及ぼし、テニエルは1893年にグラッドストーンによってサーの称号を得るまでになった。

キャロルは最初、『不思議の国のアリス』(1865年)の挿絵を、後にウィリアム・モリスらとともにアーツ・アンド・クラフツ運動を進めることになる画家ウォルター・クレイン(1845-1915)に頼むつもりだったらしい。クレインの画風は淡い色使いで優しい目をした子どもが多く、いかにも児童文学を飾るのにふさわしい。しかしクレインの予定が立たなかったためにテニエルが担当することになった。クレインの絵でなかったことが、「アリス」にどのような影響を及ぼしたかはもはや知るよしもないが、テニエルの絵による「アリス」がまさに児童文学の「個性派」と呼ぶにふさわしい「アリス」の評判に一役買ったことは間違いない。『鏡の国のアリス』(1872年)はテニエルが絵を手がけた単行本としては最後の作品である。テニエルは他にミルトンやポーの詩片に挿絵を描いたり、

シャーリー・ブルックスの本を制作したりしたし、ロイヤル・アカデミーには油絵も出品するなど正統的な画家としての活動も行っていた。しかし今やアリスの挿絵画家としてあまりにも有名である。

展示作品リスト

(1)キャロル、ルイス『不思議の国のアリス』刺線製本

(2)キャロル、ルイス『鏡の国のアリス』刺編製本 ロンドン: マクミラン社、1872年

Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland. Through the Looking Glass and What Alice Found There*. London: Macmillan, 1872. (杏林大学図書館所蔵:)

1872年当時の製本のまま。テニエルの挿絵を再現した美しい刺繍を施したベージュの布で表紙の装丁をしたのは、バースに位置する Cottage Bindery という本の装丁の専門店。子供向けの美しい装丁本を作ることでは現在でも定評がある。ーフ・タイトル (タイトル・ページの前の右側ページで、書名のみを記したもの)が当時のスタイルのままで綴じこまれている。『不思議の国のアリス』にはテニエルの挿絵が44点、『鏡の国のアリス』には同じく50点含まれている。小口部分(洋装本の背表紙を除く三方)には金箱が施されている。

(3) 『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』の挿絵 (復刻)

Sir John Tenniel's illustrations to Lewis Carroll's *Alice's adventures in Wonderland & Through the looking-glass* : ninety-one prints from the original wood blocks engraved by the Brothers Dalziel from drawings by Sir John Tenniel & one print from an electrotype.

London : Macmillan Publishers , 1988 (杏林大学所蔵)